

「場所」あるいはアイデンティティの継承

——『山の郵便配達』における「道」という「場所」——

松岡 幸司

キーワード：環境文学 場所の感覚 アイデンティティ 記憶 道

一つ一つの手紙には、どんなことであれ、それを書いた人の思いが込められている。そしてまた、それを送り届ける仕事をしている人、一人一人にそれぞれの人生がある。とかく機械化、合理化が進み、スマートになってしまうと、その背後にいる人の姿が見えにくくなる。人が三日もかけて山の中を歩きながら郵便物を配達する「山の郵便配達」の物語は、「運ぶ」ことの原点を思い起こさせてくれる¹。

彭見明の短編『山の郵便配達』は、上にあるように郵便配達の話である。一人の老人が、三日かけて100kmの道のりを歩いて郵便を配達している。その仕事を息子が受け継ぐために一度だけ二人一緒に歩いた三日間を描いたものだ。ある意味ではなんということのない、日常の延長のような三日間に行われる仕事の引継ぎ。スペクタクルな出来事も、読む者をどきどきさせるような展開もない。しかしそこにはまぎれもない生の連鎖があり、山に住む人々や、道を歩きその人々とつながる親子の姿が淡々と描かれている。老人が運び続けたもの、そしてたった一回、二人が共に歩いて運んだものは何だったのか？

本論では、この三日間に行われたことの意味、そして運ばれたものは何か、ということ、環境文学における〈場所の感覚〉と「アイデンティティ」という観点から読み解いていく。まず、〈場所の感覚〉と「アイデンティティ」について概観した後、いくつかの観点から作品を読み解く。そして最終的には、この三日間の道行きで二人が行ったこと、そして生じたことの意味を考察する²。

1. 〈場所の感覚〉とアイデンティティ

環境文学の作品では、人のアイデンティティとの関連で〈場所の感覚〉という概念が重要視される。〈場所の感覚〉とは「人間が場所との関係においてアイデンティティを獲得、あるいは再確認する行為の中核をなす感覚³」である。人間は必ずある「場所」に位置する存在であり、「場所」によって生それ自体が規定される。だからこそ人間は「私」の「場所」を獲得し、そこに帰属感を求めてゆく⁴。この「場所」というのは「土

地」とは違い、自然環境のみならず、歴史や文化からも成り立つ複合時空間である。「場所」が人間の生を支え、人間の「帰属」すべき空間となりうる。現代思想としてのエコロジーの視座から言い換えれば、「場所」は人間とその活動をも含めた生態系を構成しており、人はその生態系のすべての他者（動植物、地形、気象などを含む）との関係性から「場所」を経験すると言える。これは、「他者との関係性」を表し、その関係性から人は自己のアイデンティティを獲得するのである。喜納⁵によると、「場所」は、「空間」に包含されつつも、日常性と密接に関連すると同時に定住生活を暗示しており、その生活の蓄積の中から歴史が創造される。つまりそこで「私」のアイデンティティが形成され、帰属感の獲得と「場所」の記憶の蓄積が成されるのである。

本作品『山の郵便配達』において、老いた郵便配達員である父が長年たどってきた道が彼にとって自分のアイデンティティを与える「場所」である。それと同時に、新任の郵便配達員である息子にとっては、彼が暮らしていた土地こそがアイデンティティを与える「場所」であった。二人が一緒に歩んだ、最初で最後の三日間は、彼らのアイデンティティが交錯した時間であったと言える。

2. 最後/最初の配達

とにもかくにも出発の時はきた。いつもの朝と同じように。遠くの方には、彼らを待ちうけ、期待している者たちがいる。足もとにはどこまでも続く道がある。単調で長く、労苦に満ちた、しかしまた温かい人情に満ちあふれた道だ… (10)

いつもの同じような朝である。しかし「新しい人」にとっては最初の第一歩であり、「老いた人」にとっては、過去に別れを告げる最後の道中となる。つまりたった一度の、二人が共にする、最初で最後の出発である。しかしそれは、単に二人にとっての歩く道というだけではなく、待ち、期待する人々の人情に接する最初であり、最後の三日間でもある。そんなこととは関係なく、道はどこまでも続いている。この道が受け継がれることによって、道だけでなく、温かい人情も、そして労苦も続くことになる。

しかし、最後の歩みを進める老人には不安がある。確かに自分にはもう熱意も失せかけており、身体も思うように動かない。それでも：

息子に後を頼むといっても、かわりがつとまるだろうか？この仕事は、それぞれの家に行って手紙や新聞を届けるだけなのだろうか？そんなに単純ではない。ただ若さにまかせて、山また山を越えるだけなのだろうか？そんなに簡単ではない。
(13)

三日間の道行きは、ただ歩いて郵便物の集配をするだけではない。待ち、期待している人々との関係を引き継げるのだろうか？人々との関係を作り上げていくことは単純でも簡単でもない。「歩く」だけでなく「配達する」とはそういうことだ。人々と顔

を合わせ、言葉を交わし続けること、それは人生の接点でもある。何十年もかけて老人の身についてきたことが初めての息子にはできるのだろうか？

「帰れよ、心配するなよ。道はわかる。道は誰かに聞けばいい、と言うじゃないか」

父は沈んだ顔つきになり、今にも怒り出しそうだった。(17)

老人が歩いてきた道は、誰かに教わるようなものではない。しかし、まだ息子にはわからない。「道」を聞く相手は自分の父であるはずなのだ。老人の顔つきは怒りなのか、それとも戸惑いや不安なのだろうか？彼が歩き続けた道は、聞いて教えられるようなものではなかった。支局長が彼に同行し、その道行きを目の当たりにして「担当地域をかえて、もっと若い人に来させよう」とした際に彼はそれを断った。確かに季節ごとの道の変化は簡単に教えられるものではない。(29)しかしそれだけではなく、本当は「自分でなければならぬ」という思いが長い年月彼を歩かせてきたのである。それはまさに彼自身の道でもあったのだ。

それでも息子は、初めて歩く道に広がる目新しい景色に目を奪われながら喜色を浮かべて足を進める。それを見る老人は、期待と不安が入り混じった思いで考える。息子は「山とともに一生を過ごさなければならぬのだ。好きにならなければ！」(13-14)彼自身は山が好きだった。この「山」とは道であり、人々であり、彼の果たしてきた仕事そのものと言ってよいだろう。山の道は、彼にとって「場所」なのだ。彼は美しい景色を目にし、さびしさにうち勝ち、疲れを追い払って歩き続けてきたのだ。その思いは人間本来の豊かな想像力や感受性に基づいている。それを老人は知っていた。しかし「くそまじめな一人息子」は、すぐにこの風景から抜け出してしまっていた。

(17-18)父の感覚は息子には伝わらないのか？彼自身が歩き続けてくることのできた原動力の一つともいえるこの感覚は、これがあるからこそ山を、労苦に満ちた道を、そして郵便配達という仕事を愛し、続けてくることができたのである。果たして息子は、「彼の」配達という仕事を継ぐことができるのだろうか？

道すがら彼は、頭の中に刻まれている帳簿から様々なことを息子に教える。細かい注意事項、経験や注意を払ってきたこと、そして今後気をつけるべきことを事細かに語って聞かせた。一区切りごとに息子に理解を確認し、彼がうなずくのを見るとさらに続きを話した。老人は、ちゃんと全部が頭に入ったのか不安に思いつつも、これらのことは自分のこだわり過ぎないのではないか、という心の揺れを感じている。仕事を引き継ぐ者が知らないでよいはずはない。しかし彼自身、上述のように「伝えられないから、自分でなければならぬ」という思いもあったのだろう。(19-21)

3. 道行きの人々と

息子は父によく似ていた。笑い方、話っぷり、てきぱきとした几帳面な仕事ぶり、みんなそっくりだった。父は喜んだが、村の人々はもっと喜んだ。父はみんな

に言った。

「これからこのあたりは、うちの息子が郵便を配達するんだ」
すると大隊⁶の幹部は、率先して手をたたき、歓迎の意をあらわした。(21-22)

人々は、二人の引継ぎを喜んだ。それは、「配達」という行為を通した「人と人との関係」の継続が保証され、しかも引き継ぐのがこの老人の息子だったからである。それだけではなく彼らは、老人の今後も気にした。つい三日前に来たばかりなのに村の隅々にまで気を配って様子を尋ねる老人の存在は、村の人々にとってはただの郵便配達員ではなかった、ということだろう。彼らの「場所」に帰属する一人であったのだ。それは彼にとっても同様であった。この行為自体は、彼にとってはごく日常のことであったのだろう。そして彼の存在も村人たちにとって同様だったのだ。ここに単なる配達を越えた「人と人との関係」が現れている。それこそが「場所」の根幹に存在するものなのだ。

父がつまらないことをいつまでもしゃべっているのに耐えきれず、若い息子は犬といっしょにもうあぜ道を越え、流れに沿った小径を通して、先に歩き始めていた。(22-23)

父の態度は、初めての息子にはまだまだ理解できないものだったのだろう。これは、誰から教わるものではなく、長い年月をかけて培ってきたものである。と同時に、配達で回る村々は、老人にとってある種特別な、そして日常でもある「場所」になっていたのである。週に2回、何十年にもわたって繰り返され、続いてきた配達が作り上げてきた関係は、特別なものであると同時に皆にとってごくごく自然なものであったのだ。

茶色の犬はその赤い服を着た少女のところに走って行って止まり、喜んで彼女のまわりを回った。赤い服の少女は腰を伸ばし、道の上に郵便配達員の姿を見つけ、良く通る声で老郵便局員の名前を呼び、仕事を放り出して走り寄ると、若者の荷物を受け取った。(24)

郵便配達員の老人だけでなく同行している犬でさえ、通る村の人々にとっては、まるで近所の人のような存在になっている。そしてそれは双方向の関係でもあった。単に三日に一回来る人ではなく、当たり前存在なのだ。

結局のところ、老人にとっての郵便配達は、何十年にもわたって歩き、配達することを通して人々をつなぎ、人々をつなげ、心を結びつけていく道でもあったのだ。そのような中で繰り返したどる道は、単なる道ではなく、自分の「場所」となっていたのである。村々の人々との相互的な関係を深く作り上げ、郵便配達員としての自己意識、つまり彼のアイデンティティを形成する「場所」。この郵便配達の道こそが、彼が帰属する複合空間としての「居場所」であったのだ。

4. アイデンティティの継承(1) ～父から子へ～

父は向かいの山の方を指さしながら、息子に、あそこは何という場所で、どれだけの大隊、生産隊⁷があるか、そしてそこに仕分けして配達する必要のある新聞や雑誌の種類や数などを教えた。細々と記された帳簿が、白髪まじりの髪の毛に保護された父の脳に刻まれているかのようだった。(19-20)

ひとくさり語るたびに、父は息子に「わかったか？」とたずねた。息子がきちんとうなずいたのを見てから、続きを話した。父が語ったことは確かに「自分の仕事や経験、これまで注意を払ってきたことがら、そしてこれから先、気をつける必要のあること」であったのだが(21)、果たしてそれだけだったのだろうか？

仕事の引継ぎとしては当然のことであろう。「縦横に交錯する山川や平地を見下ろしながら」、彼は知っておくべき事柄を事細かに語っていく。(21)しかしここで行われたことは、単なる仕事の引継ぎだったのだろうか？

この作品を読むたびに思い起こされるのは、オーストリアの作家シュティフターの短編『みかげ石(Granit)⁸』である。この作品では、祖父と孫が隣り村へ出かける途上、祖父は遠近にかかわらず周りに見える事物の名前を教え、それらの由来や歴史、エピソードなどを語る。そしてたびたび繰り返される祖父の「覚えておきなさい」という言葉は、挙げられていく個々の相互関連が孫の中でしっかりと植えつけられることを促す確認の言葉である⁹。この確認作業によって「故郷」という「場所」の個々の事物が、空間的・時間的奥行きと相互の関連性を伴った全体、つまり「故郷の記憶」として孫に継承されていくことになる¹⁰。

三日間の配達の道行きで老人が息子に行っていたことも、「記憶の継承」ととらえることができよう。この記憶は、配達に関する業務だけではなく、老人の記憶であり、郵便配達員として歩んできた道、人生、そして「場所」の記憶であると言い換えることができる。その「場所」は、彼がたどった「道」の全体であり、それぞれの土地やそこに住む人々と老人のつながりを包含している。この三日間で老人が息子に伝えようとしていたのは、自身の〈場所の感覚〉であり、その「場所」で彼が作り上げてきた彼のアイデンティティでもあるのだ。しかし老人自身はそのことに気づいていない。配達という業務にしか気持ちがいていないのだが、その根底にあったのは、自身の「生」の本質的な部分である。だからこそ、自分の「道」を誰かに引き継ぐことを長年ためらってきたのであり、息子であるからこそ引き継ぐことができると考えたのである。

長年の配達と、冷たい川の渡渉の繰り返して膝を痛めていた彼は、ある川を渡る際に息子に背負われる。

今や息子が父をおぶっている。父のすでに年老いた身体をおぶっている。…
ああ、何十年もの間、たった一人、山と道、川と田畑の間を歩き来し、孤独と、

さびしさと、労苦と、疲れと犬と、郵便袋といっしょに半生を送ったのだが、その間の辛さは、今やすべてある種の甘い感覚に溶け込んでしまったようだ。この父の一粒の涙は、過去のありとあらゆる労苦の総決算だったのだろうか、それとも長い年月身になじんだあらゆるものに別れを告げることへの辛さのためだったのだろうか。(33)

息子が背負ったものは父の身体と郵便袋だけだったのだろうか？この「背負う」という行為は、全ての象徴として描かれている。息子が背負ったのは、父の道であり、記憶であり、人生であり、「場所」だったのである。いまや息子は、父の人生におけるアイデンティティを形成する道の全てを受け継いだのである。

(犬は) やさしくいたわるように舌で若者の手の甲を舐めてやった — この人はもう見知らぬ人ではなく、いい人だ。この人は自分の主人をおぶって川を渡ってくれたのだ。犬は息子に感謝していた。(34 斜字体部分は論者による)

この継承は、老人とともに歩んできた犬にも理解できるものであった。犬は息子を受け入れたのである。次からはこの若者と「道」をたどるのである。老人の郵便配達にまつわる全体の引継ぎは完了したのであった。

5. アイデンティティの継承(2) ～子から父へ～

父が話し終わると、今度は息子が話しはじめた。

山の上では、着任したばかりだから、息子にはよけいなことを言う資格はなかった。今度は父が平川里の農村に戻って自分がいた位置に取って代わろうとしている。父は数十年もの間、よそで仕事をしてきたから、平川里でのあらゆることを見知らぬことであって、何から何まで最初からやらなければならなかった。父は新米なのだ。(35)

強情な父は、息子の言うことを受け入れなければならなかった。彼が数十年の間培ってきた信念や諸事に対する姿勢は、これからたどる道、つまり新しい場所では通用しない。近所の人々や大隊長(村長)に対する接し方について、三日かけて彼が息子に語り続けてきたように、息子が熱く語り続ける。父は、「若くして老成した息子の思いを察し(37)」て不器用に受け入れた。

父はとてもいとおしそうに、早熟な息子を見た。十数歳の時にはもう否応なしに、家庭の重荷を背負って、黙々と牛のように働き、遠くの山を駆け回っていた父を家の仕事から解き放ってやり、働き過ぎの母親のために苦勞を分かっていたのだ。…分厚くてなお若く初々しい肩を、こんなにも重苦しく、こんなにも複雑な荷物が押しつぶしていたのだ。(38)

父は、自分が新米であることを受け入れようと努力しつつ、息子から引き継ぐことを実感する。彼は、この二人で過ごした最初で最後の三日間で、恐らく初めて本当に息子を見ることができたのである。息子は、自分の「道」を歩んできたのだ。上級学校への進学をあきらめ、普通の一人息子のように甘やかされることもなく(38)、他家であれば父親が背負うべき重荷を背負ってきたのだ。その息子が背負ってきたもの全体、それを父は初めて知った。それは息子の「道」であり、彼の「場所」の記憶であった。いまやそれを父が継承したのである。父は、郵便袋ではなく、息子が背負ってきた荷物を背負い始めるのだ。

6. おわりに

この二人の三日間に起きたことは何を意味しているのだろうか？それは父と子のアイデンティティの共有であり、両者の「場所」の交換を通じた統合だったのではないだろうか。

父には、広い奥行きを伴った「配達」という仕事があり、何十年もたどってきた「道」という「場所」に根差したアイデンティティがあった。しかしそれは、妻や子に支えられていたものであった。彼は「配達」の「道」を引き継ぐことを通して、自分のたどってきた道の姿を初めて知ったのである。

息子には、平川里という土地で、父のいない家庭を支える役目があった。それはその土地での人と人とのつながりの中で彼が獲得した「場所」でもあった。しかし見えないところでそれを支えていたのは父であり、「配達」の引継ぎを通してあらためて父を知ることになったのである。

この三日間を二人が共にすることで、父から子へ、そして子から父へとお互いの「場所」が相互交換され、その結果二人は「父と子」という形のアイデンティティを共有・統合することができたのである。二つの「道」はつながり、記憶の相互継承を通して「場所」が統合された。〈場所の感覚〉というものは、そう簡単に他人に引き継がれるようなものではない。しかし郵便を配達する「道」と平川里という土地はいまやひとつにつながり、二人や家族だけでなく、広く大きな「場所」が形成され始めた、と言うことができよう。こうして、つながりひとつになった「場所」によって、初めて父、子、そして妻はひとつの家族になる道を歩み始めたのである。

注

¹ 彭 見明 pp. 211-212 「訳者あとがき」より。

² 本稿は、教養講義「環境文学のすすめ(環境文学Ⅱ)」一回分の講義ノートでもある。

³ 生田 pp. 23-24.

⁴ 生田 p. 22.

⁵ 喜納 pp.11-35. 「私(たち)はどこにいる。「場所」と「居場所」と「故郷」をめぐる一考察」参照。

⁶ 生産大隊のこと。人民公社の下部組織の名称。

⁷ 人民公社の組織で、生産大隊の下部組織の名称。

⁸ シュティフター (Adalbert Stifter, 1805-1868) の短編集『石さまざま (Bunte Steine. 1853)』に収められた短編小説。

⁹ 松岡 p. 4. この確認作業により、個々の事柄の集合体としての故郷という場所が関連性を伴って孫の中で固定化される。

¹⁰ 松岡 pp. 6-7.

参考文献

1. 彭 見明 (大木康 訳):『山の郵便配達』(彭 見明 (大木康 訳):『山の郵便配達』 集英社. 2001 年. pp.7-42.). 以下、本書からの引用はページ数のみ記す。
2. 生田省吾: 覚醒する (場所の感覚) — 人間と自然環境をめぐる現代日本の言説 —. (野田研一, 結城正美 編:『越境するトポス — 環境文学論序説』 彩流社. 2004 年. pp.19-41.
3. 松岡幸司: 記憶の奥行き — 『みかげ石』における時間と空間 —. (磯崎康太郎 編:『アーダルベルト・シュティフター 1805/2005 — イメージ・空間・記憶 —』 日本独文学会研究叢書 043. 2006 年. pp.1-8.)
4. 喜納育江:『〈故郷〉のトポロジー. 場所と居場所の環境文学論』 水声社. 2011 年.

(信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 准教授)
2017 年 1 月 12 日受理 2017 年 2 月 14 日採録決定